

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

アンコンシャス・バイアスへの気づき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 関西外国語大学 公開日: 2022-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西川, 学 メールアドレス: 所属: 関西外国語大学短期大学部
URL	https://kansai.gaidai.repo.nii.ac.jp/records/8076

アンコンシャス・バイアスへの気づき

短期大学准教授 西川 学

1、はじめに ジェンダー・ギャップ

2021年3月、世界経済フォーラム（World Economic Forum）が「The Global Gender Gap Report 2021」を公表し、各国における男女格差を測るジェンダー・ギャップ指数（Gender Gap Index）を発表した。この指数は、「経済」「政治」「教育」「健康」の4つの分野のデータから作成され、0が完全不平等、1が完全平等を示している。2021年の日本の総合スコアは0.656、順位は156か国中120位であった。前回2020年の日本の総合スコアは0.652、順位は153

か国中121位（前々回2019年は149か国中110位）だったことから前回・前々回と比べて、スコアはほぼ横ばい、順位に関しては調査対象国が増えていることから考えればやや下がっていると考えることができる。この結果は、先進国の中では最低レベル、アジア諸国の中でも韓国や中国、ASEAN諸国より低い結果となっている。この結果からは日本のジェンダー・ギャップが大きいこと、世界に比べて男女格差が依然として広がったままであることが見てとれる。

では、日本のジェンダー・ギャップがこれまでも大きいと

ジェンダーギャップ指数(2021)
上位国及び主な国の順位

順位	国名	値	前年値	前年からの 順位変動
1	アイスランド	0.892	0.877	—
2	フィンランド	0.861	0.832	1
3	ノルウェー	0.849	0.842	-1
4	ニュージーランド	0.840	0.799	2
5	スウェーデン	0.823	0.820	-1
11	ドイツ	0.796	0.787	-1
16	フランス	0.784	0.781	-1
23	英国	0.775	0.767	-2
24	カナダ	0.772	0.772	-5
30	米国	0.763	0.724	23
63	イタリア	0.721	0.707	13
79	タイ	0.710	0.708	-4
81	ロシア	0.708	0.706	—
87	ベトナム	0.701	0.700	—
101	インドネシア	0.688	0.700	-16
102	韓国	0.687	0.672	6
107	中国	0.682	0.676	-1
119	アンゴラ	0.657	0.660	-1
120	日本	0.656	0.652	1
121	シエラレオネ	0.655	0.668	-10

出典:「世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2021」を公表」

指摘されながらも、なかなか改善が進まないのはなぜだろうか。その要因の一つとして、社会全体において固定的な性別役割の分担意識や無意識の思い込みが存在していることが考えられる。このような無意識の思い込みのことを、アンコンシャス・バイアス (unconscious bias) という。「無意識の偏ったモノの見方」のことで、「無意識の思い込み」「無意識の偏見」「無意識バイアス」等と表現されることもある。前号の拙稿でも触れたが、「男の子はブルー」「ピンクは女の子の色」「女の子は人形遊び」などのイメージは、外部要因のジェンダーバイアス (性的偏り・性的偏見) によって決めつけられることが多い。そのようなイメージを生む背景としても、このアンコンシャス・バイアスが存在しているのである。

2、アンコンシャス・バイアスの現状

日本のアンコンシャス・バイアスに関して、内閣府男女共同参画局が「令和3年度 性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査研究」(調査実施:令和3年8月13日～18日)の調査結果を令和3(2021)年9月30日に発表した。その調査結果を見ながら、それぞれの項目について引用しつつ、考えていきたい。なお、以下の図表はすべて「令和3年度 性別による無意識の思い込み (アンコンシャス・バイアス) に関する調査結果 (概要)」からである。まず、「性別役割に対する考え」から、性別役割意識について考察する。

性別役割に対する考え

(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の合計)

男性 上位10項目		回答者数: 5069	(%)	女性 上位10項目		回答者数: 5165	(%)
1	女性には女性らしい感性があるものだ		51.6	1	女性には女性らしい感性があるものだ		47.7
2	男性は仕事をして家計を支えるべきだ		50.3	2	男性は仕事をして家計を支えるべきだ		47.1
3	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ		37.3	3	女性は感情的になりやすい		36.6
4	女性に感情的になりやすい		35.6	4	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない		30.7
5	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない		31.8	5	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先すべきだ		23.8
6	男性は人前で泣くべきではない		31.0	6	共働きで子どもの興味が悪くなった時、母親が看病すべきだ		23.2
7	男性は結婚して家庭をもって一人前だ		30.3	7	家事・育児は女性がするべきだ		22.9
8	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ		29.8	8	組織のリーダーは男性の方が向いている		22.4
9	家事・育児は女性がするべきだ		29.5	9	大きな商談や大事な交渉事は男性がやる方がいい		22.4
10	家を継ぐのは男性であるべきだ		26.0	10	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ		22.1

男女の性別役割について、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4段階で質問した結果、男女共に「女性らしさの感性がある」「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」の上位2項目は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の合計が男性では50%以上、女性でも47%以上の5割前後の高い割合となった。このことから日本人には「女性らしさ」や「家計は男性が支える」のイメージが根強く残っていることが指摘できる。

その他の項目においては男女で差がないものもあるが、男女差が大きく開いたものは、「男性は～するべきだ」の項目である。例えば、「デートや食事代は男性が負担するべき」(男37.3% 女22.1%)では15%差、「家事・育児は女性がするべき」(男29.5% 女22.9%)では6.6%差で、女性の回答より男性の回答割合が高かった。「デートや食事代は男性が負担するべき」の考えは、男女の賃金格差も問題の背景になっていることが考えられ、その点でも男女の経済格差もさらに問題になってくることであろう。

以上の性別役割に関するアンケート結果からは、異性に対する思い込みだけでなく、男性・女性自身も無意識のうちに自分の性の役割を異性より強く意識し、その役割を果たそうと強く思い込んでいることがわかる。

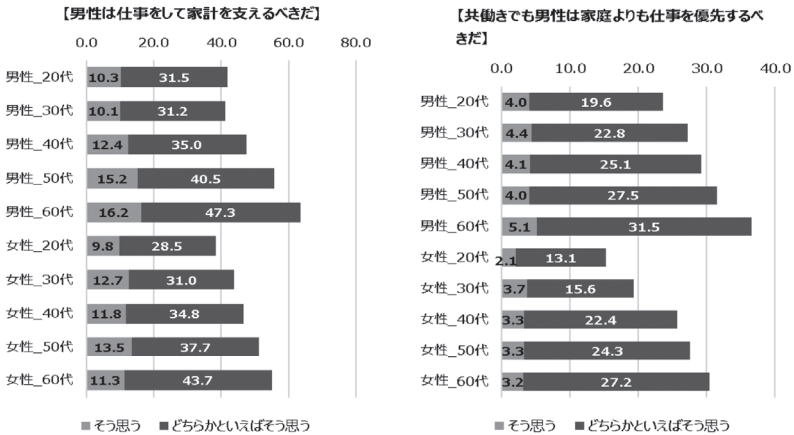
次に、「性別役割に対する考え〈シーン別〉」からシーン別の性別役割意識について考える。

性別役割に対する考え〈シーン別〉

(「そう思う」+「どちらかといえばそう思う」の合計)

家庭・コミュニティ		職場	
男性 上位5項目	(%)	女性 上位5項目	(%)
男性は仕事をして家計を支えるべきだ	50.3	男性は仕事をして家計を支えるべきだ	47.1
デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	37.3	共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先すべきだ	23.8
男性は結婚して家庭をもって一人前だ	30.3	共働きで子どもの興味が悪くなった時、母親が看病するべきだ	23.2
共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ	29.8	家事・育児は女性がするべきだ	22.9
家事・育児は女性がするべきだ	29.5	デートや食事のお金は男性が負担すべきだ	22.1
男性 上位5項目	(%)	女性 上位5項目	(%)
育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない	31.8	育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきでない	30.7
組織のリーダーは男性の方が向いている	25.7	組織のリーダーは男性の方が向いている	22.4
受付、接客・応対（お茶だしなど）は女性の仕事だ	25.1	大きな高談や大事な交渉事は男性がやる方がいい	22.4
大きな高談や大事な交渉事は男性がやる方がいい	23.5	受付、接客・応対（お茶だしなど）は女性の仕事だ	20.1
職場での上司・同僚へのお茶くみは女性がする方がいい	22.2	職場での上司・同僚へのお茶くみは女性がする方がいい	16.9

「家庭・コミュニティ」では、仕事と家事の分担に関しては、女性よりも男性の方が性別役割意識のやや強い傾向が見てとれる。依然として「男性は結婚・家庭をもって一人前」というステレオタイプの考え方が30%もあることは驚きである。また、「職場」では、男女とも1位の「育児期間中の女性は重要な仕事を担当すべきではない」との意識が強い。これは、「家事や育児は女性がするべきである」の意識や考えを背景としたことの表れであろう。そのうえ、「家庭・コミュニティ」では、男女とも5位以内に仕事と家事の分担に関する3項目が入るが、男性の方が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合が高く、女性が家事をするべきであるとの男性の強い意識をうかがい知ることができる。



さらに、性別・年代別の性別役割意識について考える。「男性は仕事をして家計を支えるべきだ」とする男性50-60代の性別役割意識が強い傾向があり、それは女性でも同様に他の年代に比べて、性別役割意識が強い傾向がある。このことから、日本の50代以上の年代には性別役割意識がまだまだ根強く残っていることがわかる。また、20-30代の男女間では、「共働きでも男性は家庭より仕事を優先すべきだ」の性別役割意識に8%以上の差がある。さらに、この意識差は若い世代の男性の方が強い傾向があり、世代での男女

の意識の差が大きくなっている。このことから、男性は若い年代から「男は仕事、女は家庭を優先すべき」の考え方や意識がこれまでと変わらずに強いことがわかる。

最後に、性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験について直接・間接経験とメディアの影響について考察する。

直接言われたり聞いたりしたことがある

男性 上位10項目	(%)
1 男性は結婚して家庭をもって一人前だ	14.2
2 男性は仕事をして家計を支えるべきだ	13.6
3 テートや食事のお金は男性が負担すべきだ	13.1
4 男性は人前で泣くべきではない	12.5
5 女性には女性らしい感性があるものだ	11.5
6 女性は感情的になりやすい	11.3
7 家を權くのは男性であるべきだ	11.1
8 家事・育児は女性がするべきだ	9.4
9 男性は残業や休日出勤をするのは当たり前だ	8.8
10 共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ	8.7

女性 上位10項目	(%)
1 女性は感情的になりやすい	19.9
2 女性には女性らしい感性があるものだ	17.2
3 家事・育児は女性がするべきだ	16.9
4 男性は仕事をして家計を支えるべきだ	16.3
5 受付、接客・応対（お茶出しなど）は女性の仕事だ	15.7
6 家を權くのは男性であるべきだ	15.4
7 男性は結婚して家庭をもって一人前だ	15.1
7 職場での上司・同僚へのお茶のみは女性がする方がよい	15.1
9 親戚や地域の会合で食事の準備や配膳をするのは女性の役割だ	14.9
10 女性は論理的に考えられない	14.0

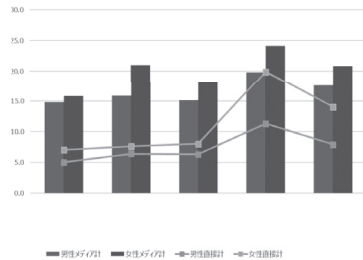
直接ではないが言動や態度からそう感じたことがある

男性 上位10項目	(%)
1 家事・育児は女性がするべきだ	22.5
2 男性は仕事をして家計を支えるべきだ	21.3
3 テートや食事のお金は男性が負担すべきだ	20.5
4 男性は結婚して家庭をもって一人前だ	20.2
5 受付、接客・応対（お茶出しなど）は女性の仕事だ	19.6
6 女性は感情的になりやすい	19.5
7 女性には女性らしい感性があるものだ	19.4
8 家を權くのは男性であるべきだ	18.7
9 共働きでも男性は家庭よりも仕事を優先するべきだ	18.6
9 親戚や地域の会合で食事の準備や配膳をするのは女性の役割だ	18.6

女性 上位10項目	(%)
1 家事・育児は女性がするべきだ	31.8
2 受付、接客・応対（お茶出しなど）は女性の仕事だ	26.7
3 男性は仕事をして家計を支えるべきだ	26.2
4 親戚や地域の会合で食事の準備や配膳をするのは女性の役割だ	26.0
5 共働きで子どもの具合が悪くなった時、母親が看病するべきだ	25.8
6 職場での上司・同僚へのお茶のみは女性がする方がよい	25.3
7 女性は感情的になりやすい	24.3
8 家を權くのは男性であるべきだ	23.9
9 奥の靴、義理の靴に脱がず、靴の介護は女性がするべきだ	23.8
10 テートや食事のお金は男性が負担すべきだ	23.6

性別役割を言ったり、言動を感じさせた人

男性 36項目中	
父親	1位に上げられた項目数 27項目
男性の知人・友人	2位に上げられた項目数 25項目
男性の職場の上司	3位に上げられた項目数 14項目
母親	3位に上げられた項目数 10項目
女性 36項目中	
男性の職場の上司	1位に上げられた項目数 13項目
配属者・パートナー	1位に上げられた項目数 10項目
父親	2位に上げられた項目数 14項目
父親	1位に上げられた項目数 7項目



性別に基づく役割や思い込みを決めつけられた経験は、「直接言われた経験（直接経験）」よりも「言動や態度から感じた経験（間接経験）」の割合が多い。また、性別役割の直接経験と間接経験の回答割合の差は、男性よりも女性の方が大きい。これは、女性の方が性別に基づく役割や思い込みを間接的に決めつけられた経験が多いことを示している。さらに、性別役割や思い

込みについて、「直接言われた、言動や態度から感じさせた」のは、男性では「父親」「男性の知人・友人」が多い。この結果からわかるのは、家庭・コミュニティと職場の両方が男性の性別役割の意識や考えに大きく影響を与えている可能性があることである。また、同じく女性では「配偶者・パートナー」からの影響を大きく受けて、家事分担や職場・働き方について性別役割を感じているようである。さらに、職場においては、男女とも「男性の職場の上司」から性別役割を感じさせられた経験が多いことがわかる。その「男性の職場の上司」とは、性別・年代別の性別役割意識で述べた50-60代の「男は仕事、女は家庭を優先するべき」の意識や考えが強い世代である。その影響を50代以下の男女が職場で直接・間接的に大きく影響を受け、それぞれの性別役割意識のステレオタイプが埋め込まれ、醸成されているのである。そのうえ、女性メディア（「テレビや雑誌、インターネットなどのメディアで見たことがある」の回答割合）で見たり聞いたりすることが多いのは、「女性は感情的になりやすい」「女性は論理的に考えられない」であり、これは女性の直接経験（「直接言われたり聞いたりしたことがある」の回答割合）でも同様に高い傾向がある。女性に関しては、「感情的になりやすい」「論理的に考えられない」といった固定観念がメディアを通して宣伝されているということであろう。そして、女性では「男性は出産休暇／育児休業を取るべきでない」の回答割合が多いことである。これはメディアにおいて「男性は出産休暇／育児休業を取るべきでない」とする性別役割意識が高いことを象徴しているのではないだろうか。

以上、「令和3年度性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究」からは、現在の日本人の性別におけるアンコンシャス・バイアスの実態を知ることができた。それを4点にまとめると、

- 男女ともにそれぞれの性別役割意識が強いこと
- 「家事・育児は女性がするべきだ」「男は仕事・女は家庭」の意識が男女ともに高いこと
- 性別役割の影響は、男性は父親や友人から、女性は配偶者・パートナー

からであること

- 職場では、男女とも「男性の職場の上司」から性別役割の影響を強く受けること

である。これらのように、なかなか日本社会における男女の性別役割意識が変わらないアンコンシャス・バイアスの存在を明らかに指摘することができた。

3、アンコンシャス・バイアスの解消方法

では、これらのアンコンシャス・バイアスを解消するためにどのようにすればよいのであろうか。その解消法の1つは、教育であろう。その重要性は、SDGsのジェンダー平等の教育へとつながるのである。

SDGs（持続可能な開発目標：Sustainable Development Goals）とは、世界で広がる貧困と格差、地球環境の危機を克服し、「持続可能な社会・経済・環境」に転換することを目指す、世界共通の目標である。2015年に国連で開催された「持続可能な開発サミット」で、日本も賛同し、国連加盟国193カ国の首脳が全会一致で採択した。2030年の達成期限を設け、17のゴールと169のターゲットにすべての国が取り組むことを約束している。そのSDGsの5番目の目標が「ジェンダー平等」である。「ジェンダー平等」とは、ひとりひとりの人間が、性別にかかわらず、平等に責任や権利や機会を分かちあい、あらゆる物事を一緒に決めることができることを意味している。男性と女性は、身体づくりは異なっているが、平等であるはずである。ところが、今の社会では、男性に向いている役割や責任、女性に向いている役割や責任など、個人の希望や能力ではなく「性別」によって生き方や働き方の選択肢や機会が決められてしまうことがある。そこで、世界中で、法律や制度を変えたり、教育やメディアを通じた意識啓発を行ったりすることで、社会的・文化的に作られた性別（ジェンダー）を問い直し、ひとりひとりの人権を尊重しつつ責任を分かち合い、性別に関わりなく、その個性と能力を十分に発

揮することができる社会を創るための取り組みが行われている。同時に、「女の子だから」「女性だから」という理由で直面する障壁を取り除き、自分の人生を自分で決めながら生きるための力を身につける取り組み（エンパワーメント）も行われている。

「ジェンダーの平等と女性・女の子のエンパワーメント」は、SDGsの重要なテーマであるとされる。また、日本では「男女共同参画社会基本法」で21世紀の最重要課題と位置付けられている。つまり、SDGsの中でジェンダー平等はとても重要なテーマなのである。このジェンダー平等を実現させるためにも、アンコンシャス・バイアスを変えていかなければならない。その一例として、内閣府男女共同参画局は「みんなで目指す！ SDGs×ジェンダー平等」という中学生向けの副教材を作成している。このような教材が作られ、様々な教育現場で実践されることで、子どもたちのジェンダー・バイアスが変化し、アンコンシャス・バイアスも将来的には改善されていくことであろう。

では、大人のアンコンシャス・バイアスはどのように改善・解消すればよいのであろうか。その点については、一般社団法人アンコンシャスバイアス研究所の代表理事 守屋智敬はアンコンシャス・バイアスに対する3つの具体的な対処法とその理由を次のように紹介している。

対処法1 決めつけない、押しつけない

対処法2 相手の表情や態度の変化など「サイン」に注目する

対処法3 自己認知

アンコンシャス・バイアスから生まれる言動には、「普通そうだ」「こうあるべきだ」「どうせムリだ」のような決めつけや押しつけが挙げられる。例えば、「子育て中の女性は、普通、長期出張は無理だ」、「この仕事は、たいていの男性には無理だ」のように、自分の決めつけや押しつけの意見や感想が背景にある。もしその言動に気づくことができれば、「これは、私のアンコンシャス・バイアスかも？」と疑ってみることができる。すなわち、頭ご

なしに自分自身で決めつけず、それぞれの人と個別に対話することで他者理解し、相手を尊重する心の姿勢を持つことが可能になるのである。

また、相手の受け止め方がサインとなってあらわれることがある。「急に表情が曇った」「声のトーンが変わった」「キーボードを打つ音が大きくなった」「オンライン会議中に急にビデオがOFFになった」などのサインに気づくことができたなら、「私のアンコンシャス・バイアスによる言動が、相手の心のあと味を濁したかも？」と、ぜひ立ち止まってみることである。違和感をそのままにせず、相手がどのような気持ちになったかを確認、誤解を解いておく必要がある。

さらに、アンコンシャス・バイアスの正体は「自己防衛心」である。脳が無意識のうちに自分にとって都合のよい解釈をすることによって起きているのである。自然の摂理であり、完全に払しょくすることはできない。だからこそ、アンコンシャス・バイアスに気づこうと、ひとりひとりが意識することが大切であるのだ。

以上のことから、まずは自分がアンコンシャス・バイアスを持っていることを自覚し、それが他者に対してどのような影響を与えているか常に意識することが大切であることがわかった。無意識のことを意識することは難しいことであるかもしれない。しかし、自分の言動で相手がどのように思うかをあらかじめ予想・予測し、考えておくことで、相手にどのような影響を与えてしまうかに気づくことができる。その気遣いや気づきこそがアンコンシャス・バイアスの解消につながるのである。

4、おわりに

2021年8月、1年延期になった「東京オリンピック2020」がようやく開催された。しかし、その開催の直前には組織委員会元会長の女性軽視発言や総合演出家のタレントの容姿に対する不適切な発言問題があり、日本のジェンダー・ギャップや男女格差を世界に不名誉な形で知らしめ、曝してしまう出来事があった。しかし、年末には「現代用語の基礎知識選 2021ユーキャン

新語・流行語大賞」に「ジェンダー平等」の言葉がノミネートされ、この言葉が最終的にはトップ10に入賞した。後者は、日本のジェンダー・ギャップ改善にとっては明るいニュースである。このような動きは日本社会で歓迎すべきもので、日本人全体がジェンダー平等を意識すれば、アンコンシャス・バイアスも改善されるはずであるからだ。これからは「男らしさ」「女らしさ」にこだわるよりも、「自分らしさ」を大切にすることが重要になってくるであろう。

ただ、男性も女性も自分がそれぞれの性別であることに不利益を感じ、ジェンダーについてもそれぞれの考え方があり。そのため、それらの考えを全く否定するものではない。しかし、固定的な凝り固まったジェンダーの思考や意識を他者に対して決めつけることをしてはならない。なぜなら、それが先入観や思い込みを生むことにつながるからである。そして、これらのことはさらに差別や人権侵害へと結びつき、発展していく危険性があるからである。それよりも、様々なジェンダーに対する考えを受け止めること、認め合うことが大切なのではないだろうか。それにより、相手をわかろうとすることで他者理解が深まり、人権尊重へとつながっていくことができるのである。そして、そのことがダイバーシティ&インクルージョンのこれからの社会において求められることなのである。

先日、本学の学生主催のイベントに出席した。その折に、司会（ファシリテーター）の学生がイベント開始前、参加者に自分に当てはまることだと思ったら拍手するというアイスブレイクを行った。その場の参加者の気持ちをほぐし、これから始まるイベントを盛り上げる目的であったのだろう。しかし、開口一番に出た言葉が「男の人」「女の人」であった。前述したように、このアイスブレイクでは自分が当てはまると思ったら、拍手をして意思表示をするのであるが、私はとっさにこの場で拍手できない人や拍手したくないと思っている人がどれほどいるだろうかと想像した。ただのアイスブレイクであり、その後も「めがねをかけている人」「コンタクトレンズの人」「裸眼の人」などとファシリテーターの学生が発言し、会場は和やかに拍手して盛り上がっていったので、特に問題視する必要はないのかもしれない。しかし、ジェ

ンダー平等やセクシャリティの意識があれば、あえて「男女」の例を使う必要があるかどうかを考えることができたのではないだろうか。他者理解と人権尊重こそ、ジェンダー平等やダイバーシティ&インクルージョンの考えである。そして、それがアンコンシャス・バイアスを取り払う具体的な実践でもある。なぜなら、多様性を認めるためには、理解と配慮が不可欠であるからである。今後も大学教育においてその意識や視点がますます重要になってくることを感じた。そして、これからの自分の授業でもジェンダー平等やダイバーシティ&インクルージョンの大切さを学生に強く訴えていき、学生のアンコンシャス・バイアスが解消されるように努めていきたいと強く決意した。

【引用・参考文献/URL】

内閣府男女共同参画局（2020）「世界経済フォーラムが「ジェンダー・ギャップ指数2020」を公表」月刊総合情報誌『共同参画』2020年3・4月号（第132号）p.11

西川学（2021）「ジェンダーニュートラルの社会へ」『人権を考える』第24号、p.125-133

内閣府男女共同参画局（2021）「令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査研究 調査結果」令和3年9月30日

https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r03/02.pdf（最終閲覧日2022年1月15日）

内閣府男女共同参画局（2021）「令和3年度 性別による無意識の思い込み（アンコンシャス・バイアス）に関する調査結果（概要）」令和3年9月30日
https://www.gender.go.jp/research/kenkyu/pdf/seibetsu_r03/01.pdf（最終閲覧日2022年1月15日）

内閣府男女共同参画局（2021）「みんなで目指す！SDGs×ジェンダー平等」

<https://www.gender.go.jp/public/subtextbooks/pdf/subtextbooks.pdf>（最終閲覧日2022年1月15日）

内閣府男女共同参画局（2021）「アンコンシャス・バイアスの気づきは、ひとりひとりがイキイキと活躍する社会への第一歩」月刊総合情報誌『共同参画』2021年5月号（第144号）p.2-3

NHKクローズアップ現代（2021）「ジェンダーVol.24 ジェンダー格差 男性はどう思ってる？NHK世論調査より②」2021年7月9日

<https://www.nhk.or.jp/gendai/comment/0029/topic024.html>（最終閲覧日2022年1月15日）

治部れんげ（2020）『「男女格差後進国」の衝撃 無意識のジェンダー・バイアスを克服する』小学館